黒澤ダイヤとの日常

しぇく

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何番煎じか分からない黒澤ダイヤとオリ主の日常。

映画のダイヤちゃん可愛すぎね？ってことで書き始めた作品。

しっかり原作やります。

こんなダイヤちゃんが見たい人は感想くれたらアンケート作るかも。。。

Ｔｗｉｔｔｅｒでそういう意見送ってくれてもうれし。

てことで、Ｔｗｉｔｔｅｒもよろすく（）

目　次

出会い ―― 1
バレンタインデー ―― 4
デート ―― 7
語らい？ ―― 10

出会い

「うーわっ、寒ー・何この寒さ、辛すぎるわ！」
男は、炬燵のなかでこの寒さについてぼやいていた。
まぁ、それも仕方ない。外の気温は氷点を下回る寒さがあり、それが室内に伝わっている。また、この部屋は暖をとれるものが炬燵しかない。室内の空気が暖らないため、極寒となっている。
「ダイヤー！・こっち来なよぉ！一緒に暖まろう！」
「はいはい、少々お待ちなさい。わたくしが今お茶を沸かしているでしょう」
「いいよ、沸くまでコタツの中で。そこで待ってたら風邪ひくんじゃない？」
「いえ、ちょうど沸きましたわ。今そっちに持っていくので待っててください、ゆうきさん」
黒澤ダイヤと橋本ゆうきは付き合っている。
そのため、どちらかの家で会うなんて日常茶飯事だ。
今日はゆうきの家で2人してイチャついていた。
「あ～、ダイヤは抱き心地も暖かさも最高だね。ずっとこのままいたいわ」
「もう、恥ずかしいのでおやめなさい！ちょっ、抱きつく力強めないで！」
顔を真っ赤にしながら、抵抗しようとするダイヤ。
しかし、嬉しさが強いのか顔がにやけている。
「ダイヤは嫌か？俺に抱きつかれるのは」
ゆうきがそう聞くと、ダイヤは顔を俯かせて抵抗をしなくなった。
そして、自分からもギュッと力をいれてゆうきを抱きしめる。
「嫌なわけないでしょう。大好きな恋人からの抱擁は嬉しいですわ。幸せだと感じています。ですが、やはり恥ずかしいのですわ」
「俺らが付き合って2年経つんだよ？・慣れてもいいんじゃない？」
「それは、そうですけれど……」

今、この2人は高校2年生。
中学3年生からの付き合い始めた経緯を説明しよう。
夏休みのある日、名古屋市内の名古屋駅から離れているところに住んでいたゆうきは、買い物をするため名古屋駅まで来ていた。

「あの、ポニーテールで紺桔梗の髪の子と金髪で髪を右側に6の形にしている子を見ませんでしたか？
その子達とはぐれてしまいまして……」
そこで、松浦果南と小原鞠莉とはぐれてしまったダイヤがゆうきに尋ねていた。
「うーん、ごめんね。見てないんだ。ん？いや、それらしい子見たな……よし！その子達も探してると思うから見た辺りまで案内するよ」
「ありがとうございますわ！とても助かります！」
そして、しっかりと会うことが出来、後日お礼がしたいとの事で連絡先を交換した。
そのまま、交友関係は続きその翌年のバレンタインデー、ダイヤがゆうきにチョコを渡し見事に付き合い始めた。
そこから、ダイヤが住んでいる沼津市内浦まで引っ越して来たのだ。高校も、編入試験を受け無事合格。1人暮らしを始めた。今では、元女子高だった浦の星学院に通っている。
「初めて会った時は、果南と鞠莉とはぐれてたね」
「そうですわね。なつかしいですわ……ですが、そのおかげで今こうして貴方と付き合っているのだと思うと良かったのかも知れません」
「あ～、もう！可愛いなぁ、ダイヤは！」
ゆうきがダイヤを押し倒す。それで、顔を真っ赤にするダイヤ。
そのまま2人とも顔を近づいていき、重なった。
「ダイヤ、大好きだ」
「ええ、わたくしも大好きですわ」

これは２人の……時々Ａｑｏｕｒｓの物語。

バレンタインデー

今日は２／１４、バレンタインデーだ。
男の非リア達は、貰えるかな？と淡い期待を抱き、結局貰えず血涙を流して第４次聖杯戦争のランサーのように世界に呪いあれと呪詛をはく日。
その一方で、リア充は恋人からチョコを貰い最高の一日として満喫している。

ゆうきは、後者の方だった。
それは当然だろう……ゆうきがダイヤの家に遊びに行き、ダイヤの妹、黒澤ルビィから義兄と慕われているため義理チョコを貰い、ダイヤ以外のＡｑｏｕｒｓのグループ全員からの義理チョコとダイヤの本命チョコを貰うという、非リアからもリア充からも呪われそうな一日をすごしていた。
「やばいな、これは……俺、Ａｑｏｕｒｓのファンに刺される気しかしないんだけど……」
「そうですわね……まさか、わたくし以外のＡｑｏｕｒｓの皆さんが貴方にチョコを渡すとは思っても見ませんでしたわ。モテモテですわね？」
少し当たりがキツいのは嫉妬からなのだろう。
自分の恋人が知り合いとはいえ８人からもチョコを貰っているのだ。嫉妬したくもなるはずだ。
「いつものお礼、だってさ。ダイヤが俺との事をすごく幸せそうに話すからって。ダイヤがＡｑｏｕｒｓのみんなに愛されてるからだとおもうけど？」
Ａｑｏｕｒｓのみんなは、ゆうきと交友関係はあるがそれはダイヤの恋人だからだろう。みんなゆうきのことを友人だと思っていてもそれだけでチョコを渡すつもりなんてなかった。
しかし、ダイヤがゆうきとの日々を幸せそうに惚気けるため、Ａｑｏｕｒｓのみんなが感謝の気持ちとして、ゆうきにチョコを渡したの

だ。
「そう、でしたのね……わたくしはみなさんにとても愛されているのですね……」
「あと、俺はダイヤ一筋だからね。Ａｑｏｕｒｓのファンとして応援しているけれど、ダイヤ以外と付き合いたいと思ったことはないよ？」
ゆうきはダイヤ一筋だ。以前ダイヤがゆうきに騙されてないかと疑った果南と鞠莉はゆうきに言い寄った。
しかしそこで、靡く様子もなくキッパリとダイヤ以外は興味ないと言い放った。
そんな記録をもつゆうきがチョコを貰った程度でダイヤを捨てるはずがない。
「うぅ……申し訳ありませんわ！なんでもするので許して下さりませんか？」
「ん？今なんでもするって？言質取ったからね？」
少しニヤリと笑いダイヤに問いかけた。
そんなゆうきに危機感を持ったのか慌てた様子で
「過剰なことはダメですわよ!?」
「大丈夫、そんな事しないから。チョコをあーんしてよ」
「えっ？そんなことでよろしいのですか？それならいいですけれど」
そういい、口元に運ぶダイヤ。チョコをゆうきが食べたのを見て、幸せそうに口を緩めた。
「ほら、こっちからも。あーん」
言われた通りにするダイヤ。
目を瞑り、口を少し開く姿はとても可愛い。
そうして、ゆうきはチョコを口に咥えダイヤに近づいていく。
そのままキスをして、ダイヤが驚いたようにビクッとする。
しかし、恋人とのキスが好きなのかそのまま目を瞑り、もっとと強請り始めた。
そんな姿が可愛くてゆうきはキスを激しくする。

そのまま、夜を過ごしていた。

「お姉ちゃん？お義兄ちゃん？ご飯出来たって……

ピギィ!?ごめんなさい！ルビィ何もみてないからぁ！」

「ちょっ、待ちなさいルビィ！今のは違うのですわ！」

そんなこんなで、ゆうきとダイヤはバレンタインデーを過ごした。

デート

テストが終わり、ゆっくりまったり出来るかと思えば、来年は3年生と受験生のために勉強しなければならなかった。

「あー、なんでテストが終わったのに、勉強しなきゃいけないのか……」

「卒業式も終え、もう少しで私(わたくし)たちが受験生だからですわ。一緒の大学に行くのでしょう?でしたら、頑張りましょう」

ゆうきとダイヤは一緒に東京の大学へ行くと約束している。また、その大学の偏差値が高いため、今から勉強しているという訳だ。

「そうだけどさ……せめて、休みが欲しいんだよ。ダイヤと遊びに行けなかったし」

「ですから、こうして一緒に勉強しているのでしょう?

ほら、もう少し頑張りましょう。落第なんて目も当てられませんわよ?」

「はぁ……しょうがない!ダイヤとの大学生活を守るために、この1年間頑張るとしますか!」

「その意気ですわ!ですが、息抜きというのも大事ですので勉強が終わりましたら、一緒にデートに行きませんか?」

「いいよ。行こうか」

ゆうきが了承すると、ダイヤの顔がほころんだ。

やはりダイヤもゆうきと毎日会っていてもデートは特別なものなのだろう。

顔に「デートが楽しみ」と書いてある。

＊　＊　＊

そんなこんなで勉強を終わらせてデートの始まりである。

ダイヤはゆうきと腕を組んだ。
「ん、どうしたんだ？急に腕組んで……」
「たまにはいいでしょう？私も甘えたいことだってあるのですわ…」
「そっか、がんばったね。毎回1位も大変でしょ？お疲れ様、頑張ったね」
そう言いながらゆうきがダイヤの頭を撫でる。
撫でられて顔がふにゃっと緩む。
そんなダイヤが可愛くてもっと撫でる。
それでまた緩む。と繰り返していたが、はっ、と気づいてデートを再開した。
「この服似合うんじゃない？」
「私には似合いませんわ。少し恥ずかしい……」
「可愛いと思うんだけどなぁ？果南とかも賛同してくれる気がするけど」
そう言うと少しダイヤが顔を膨れさせる。
「デート中に、私の親友とはいえ、私以外の女性の名前を言わないでください……妬いてしまいますわ……」
ゆうきは少し驚きながらも嬉しそうに謝った。
ちゃんと愛されていると感じて嬉しいのだろう。
「ごめん、でもそれぐらい可愛いってことを言いたいんだよ。絶対似合うから、着てみてよ」
ゆうきが来て欲しいと言っているのは、所謂ジャンボネックケーブルセーターだ。
赤色でフワフワで、可愛さと大人っぽさを合わせ持った服装だ。絶対に似合うだろう。
「もう、しょうがないですわね……着てくるのでちょっと待っててください」
「了解。ゆっくりでいいからね？」

＊　＊　＊

「着替えてきましたわ。どうですか？似合いますか？」
「……」
ジャンボネックケーブルセーターを着ているダイヤはとても可愛かった。ゆうきが言葉を無くしたのも頷けるだろう。
「えっと、ゆうきさん？なんか言って欲しいのですけれど……」
しかし、ダイヤが感想を求めてきたので意識を復活させて思ったことを言う。
「可愛い、すげぇ可愛いよ。いつも着なさそうな服装だから新鮮さがあるし、かわいらしさと大人っぽさがあるからすごく似合ってる」
「そうですか……分かりましたわ。これ購入致しますわ」
「そっか、いいと思うよすごく似合うし。めちゃくちゃ可愛いよ」
そう言われて嬉しそうにはにかみ、ゆうきにお礼を言う。
買った服をゆうきが購入し、その後もデートを続けた。
そのままダイヤを家へと送っていった。
「今日は楽しかったですわ！服も買っていただいて……ありがとうございます。とても楽しかったですわ」
「いいよいいよ。俺も楽しかったし、またデートに行こうか」
「そうですわね、また行きましょう。
それと……これは今日のお礼です」
そう言いながらゆうきへと近づきキスをする。
口唇が触れ合う優しいキスだった。
嬉しそうに唇を触るダイヤにゆうきは驚くも嬉しそうに微笑みギュッと抱きしめる。
そんな2人を月が優しく照らしていた。

語らい？

「やはり、受験生自体減っていますのね……このままでは浦の星は……」

「……そうだね。だけど、まだ時間がある。浦の星のために動けることもあるはずだよ」

黒澤ダイヤと橋本ゆうきは生徒会長、副会長だ。

3年生達も卒業ということでこのふたりが今は学校を支えている。

その2人が学校に来て受験生の数を数えていた。

その結果はやはり年々減っている。

「そうですわね……私達が諦めては生徒に示しがつきません！大切な思い出がいっぱい詰まった学校ですもの……今はまだバラバラですが、あのお2人とゆうきさんとの思い出はなくさせません」

「うん、それでこそダイヤだ。一緒に頑張ろうか」

（それに……来年度にはあの子も帰って来るし）

そうしてゆうきは微笑みながら、ダイヤ達幼馴染3人が笑い合っている姿を想像した。

＊　＊　＊

ダイヤとゆうきは生徒会の仕事を終わらせ、2人で松月に来ていた。

ここは珍しく『みかんどら焼き』なるものがある。

普通のどら焼きのように見えるが白餡にみかん果汁が入っており、みかんの風味と白餡が絶妙なバランスで大変美味しい。

２人は、みかんどら焼きとみかんタルトを注文し、席に着いた。

「やっぱり、ここのみかん菓子は美味しいな」

「そうですわね。それにいい雰囲気ですので、いつ来ても落ち着きますわ」

「ほらダイヤ、あーん」

「えっ!?ちょ、ちょっと!は、恥ずかしいですわ……」

「あーん」

恥ずかしいと少し照れ気味で言うダイヤを無視しあーんを続けるゆうき。

何度も言い続けるゆうきに負けたのか口を開きタルトを食べる。

「もう、しょうがないですわね……美味しい!これ、ゆうきさんも食べたらいかが?」

ゆうきは1度頷き、口に入れる。

「……うん、美味しい!やっぱり、内浦のみかんは美味しいね。名古屋の方はあまり美味しい果物がないから……」

「ですが、美味しい料理とかありますわよね?私はきしめんとか味噌煮込みうどんとか好きですわよ」

「うん、ありがと。ただ、あっちは人が多くてみんながみんな忙しないからね。やっぱりこっちの雰囲気が好きだな。だからさダイヤ、俺は感謝してるよ。ダイヤと出会えて、ダイヤと付き合えたから今こうして俺は沼津の内浦で過ごすことが出来てるんだから。ありがと」

「いえ、こちらこそありがとうございますわ。あの日、ゆうきさんと出会って、こうして一緒に過ごすことが出来るのがとても楽しいですわ。これからもよろしくお願いしますわね」

２人ともとても幸せそうな顔をしている。

それはやはり、こうして一緒に過ごすのが楽しいからなのだろう。

２人は、手を絡ませあう。所謂恋人繋ぎを机の下で繋ぎながら微笑み合う。

そして、唇どうしを合わせる。

自分達の息が切れるまでの時間、ずっと2人はキスをし続けた。

「ゆうきさん、愛していますわ」

「俺もだよ、ダイヤ。愛してる」